

KIDS SMILE LABO JOURNAL

“キッズ スマイル ラボ ジャーナル”

KIDS SMILE LABO が発行するフリーペーパー。普段 SNS でしか見られない保育園の子どもたちの様子や、子育てに関する情報等、最新情報をお届けします。

Vol.36
2024
JUNE
TAKE FREE



KIDS SMILE LABO の 1 枚。

副園長の森誉さんが選んだ、とっておきの 1 枚を紹介します！

“心通わせる日常”

お揃いの野花を手に取ってかけてくる二人
表情と仕草に表れる、見て見て！という気持ち
同じものに興味をもち、「一緒」を楽しんだり
見てほしいよ、という気持ちを受け止めてもらったり
日々の小さな発見の中にはたくさんの心のやりとりがある

笑顔が交わる瞬間に育まれるもの
共に驚き、共に喜ぶ時間に深まるもの
大人たちの温かいまなざしは
安心感と勇気を与えてくれる

そうした日々が重なり
互いに成長し合い、支え合う
その関係が未来への力となる

photo & text by morimori

JOURNAL TOPIC

- 01 KIDS SMILE LABO CLASS NEWS
6月の子どもたちの様子をピックアップ！
- 02 コラム『子どもの歯磨き粉っていつから？』
子どもの歯のこと、いっしょに考えませんか？
- 03 お蚕さん物語
KIDS SMILE LABO にお蚕さんがやってきました。蚕の歴史と共にご覧ください！

kidssmilelabo.com

@kidssmilelabo

KIDS SMILE LABO

@kidssmilelabo

@KIDS_SMILE_LABO

from KOMOREBI <0歳児>



室内あそび
~ 巨大ダンボールハウス! ~

水遊びに砂場、広場の探索と毎日戸外活動を楽しんでいるこもれびクラスの子も達。最近では雨で散歩へ行けない日も段々増えてきましたが、たとえ外へ行けなくても子ども達は室内でも元気いっぱい活動しています。

最近のお気に入り室内遊びは「巨大ダンボールハウス」です!

こもれびクラス全員が入ってしまう程の大きなダンボール、一目ダンボールを見た瞬間から子ども達の目がきらきらと輝き、「なんだ?なんだ?」と、吸い込まれるようにダンボールの中へと入っていきました。出たり入ったりを楽しむ子、ダンボール内の薄暗さに心地よさを感じてごろんと寝転ぶ子、太鼓のようにダンボールを叩いて音を楽しむ子、それぞれの遊び方で楽しむ姿が見られました。

ひとしきり遊んだ後は、ダンボールにいくつか穴を開けてみました。すると今度は穴にボールを落としてみたり、穴から顔を出したり、友達といないないばあをしてみたり、声を上げて笑いながら子ども達が顔を見合わせる姿はとても微笑ましく、見ているこちら心もほっこりしてしまいます。

梅雨が明けると夏本番となります。これからの季節、戸外へ行ける日も少なくなりますが、ダンボール以外にもプールや感触遊びなど、室内ならではの活動もたくさんあります。そのひとつひとつを子ども達と楽しみながら暑い夏を乗り越えていきたいと思います!

文 あやや

まねっこじょうずはおしゃべりじょうず

「いーいーいーじん!」

このことば、なんとおっしゃっているかわかりますか?

給食の時間、スープの中に入っていたにんじんを見つけて私に教えてくれたあるとこの子。

「そうだね、にんじんだね!」と伝えると得意な顔ををし、何度も繰り返し話して嬉しそうに食べていたのが印象的でした。

少しずつことばが増えてきたそよかぜの子どもたち。

私たちの身の回りには常にたくさんのことばや音が溢れています。

今まではアイコンタクトで首を縦・横に振る仕草や、表情豊かに気持ちを伝えていたみんなが絵本や紙芝居、街の中で目にした物や聞いた音、動きをことばにする姿が多くなってきました。発語には個人差もありますが、嬉しそうに子どもたちが話す姿、その一生懸命さはとてもかわいいものです。私たちが上手に聞き取れず「ん?なんだって??笑」と聞き返してしまう時もしばしば。今の時期ならではの、大人には真似する事が難しい喃語や単語、かわいいことばの世界が広がっています。絵本を読んでほしい、ぬいぐるみを抱っこしたい時には「ん、ん!」と大人の元へお願いしにきます。やってもらいたい子どもの気持ちを汲み取りつつ、「読んで」や「手伝って」だよ。と伝えると自分のことばにして話してくれます。そうして関わりながらことばをなげかけ、今はみんなで「カーレー!」の練習中。

話す事の面白さや友だちと気持ちのやり取りを経験しながらたくさんのことばに触れてもらいたいと思います。

文 れいちゃん

from SOYOKAZE <1歳児>



プリンちゃんのエビーズとの日々

今月は4月末に恩曾川で出会って、のばなクラスで飼育していたザリガニとエビ5匹のお話をしようと思います。

園に持ち帰り、飼育を始めた頃。

みんなで愛情を持ってお世話できるといいなと思い、まずは名前を決めました。ザリガニの名前はプリプリ動くね!という話から「プリンちゃんは?」とSちゃんが提案してくれ、名前は『プリンちゃん』に決定しました!

エビは5匹いて見分けがつかない為、名前は決めず、保育者はエビーズと呼んでいます笑さて、ここからはプリンちゃんのエビーズとの生活が始まります。

ごはん調達の為、スーパーに煮干しを買いに行ったり、週に2度ほど水槽を綺麗にしてあげたり、登園してから1番にプリンちゃんのエビーズの様子を観察していたりと、愛を持ってお世話をしていました。

いつものように観察をしていると、エビーズ3匹のお腹に卵を見つけました。子ども達と毎日見守っていましたが、何週間か経ったある日、卵から小さくて可愛いエビが沢山誕生したのです。

子どもたちは小さなエビーズを「可愛いね!」と眺めています。

しかし、夏に向け気温が上がってきたからか、プリンちゃんの動きが少なくなり元気がなさそうでした。

そこで、子どもたちにプリンちゃん住みやすい環境へ見送ることを提案しました。始めは「嫌だ!」と言っている子もいましたが、水槽から出て元気に過ごすプリンちゃんをみて安心している様子でした。

またいつかプリンちゃんに会えるように。と、みんなで願いながら別れを告げました。

生まれてから少しずつ大きくなっているエビーズのことは、引き続き子どもたちと一緒に成長を見守っていきます。

どこまで大きく育つか。水槽から目が離せません!

文 みーちゃん

from NOBANA <2歳児>



from MINAMO OZORA DAICHI <3・4・5歳児>

室内あそび
～ 巨大ダンボールハウス！～

今年度1回目のアートの日、ダンボールを素材として選び、進めていきました。初めに段ボールの特徴を子どもたちと共に確認すると、「手でもちぎれる」「でこぼこな部分とつるつるな部分がある」「くねくね曲がる」等、普段触れ合っている素材でありながらも様々な発見をしていました。

また、アート講師のきこちゃんのちぎった段ボールの形を見て、「さかなみたい」「ぼうしみたい」と想像を膨らませていました。形を何かに見立てていくうちに、「〇〇つくりたい!」と作りたい物のイメージも湧いてきたようです。

製作を始めるとまずは絵の具に触れる子どもたち。みなもクラスは幼児クラスになって今年度初めてのアートの日ということもあり少し緊張気味の様子。

「やりたくない」と言う子もいましたが、1番親しみのある絵の具に触れているうちに夢中になって手を動かしているうちに緊張の糸が解けていくのが分かりました。できたものを友達や大人に見せ、「〇〇つくれたの!」と言う姿は楽しさや自信に満ち溢れていました。この経験が次回のアートの日に確実に繋がると感じます。

おおぞらクラスは表現の仕方が平面から立体に変化していきました。初めはみなもさんと同じく、段ボールを好きな絵の具で塗っていたのですが、それらを重ねてみたり、作りたいものに近づこう組み立ててみたり...

年上の子どもたちの様子を見ながら真似して作ろうと試行錯誤する子もいました。

そして、さすがは年長さん。だいちクラスの子もたちは製作を始める前に「キャンピングカーをつくる!」「おうちをつくる!」とイメージが次々に湧いていました。作りたい物を頭に思い描きながら製作をしていると「アーティストってのしい!」と、言葉になって気持ちが溢れてきました。「表現することを楽しむ」アーティストが確かにそこに居ました。

各クラス製作の進め方に違いはあったものの、基盤となる「表現ってのしい!」をたっぷり感じられた1回目のアートの日になったと感じます。今後、各年齢ごとの子どもたちの変化が楽しみです。

文 ゆりゆり



アート講師 きこちゃんを
ご紹介いたします

アートの時間に大切にしていること

- 子どもの感性（心）が満足のいくことを大切にすること
- カタチ（作品）にこだわらずに体験に価値を持つこと
- 大人は教えるのではなく、表現者として共に過ごすこと
- 日常につながる個を尊重した表現を体験すること



アートの時間は、上手に絵を描いたりモノをつくらしたりするのが目的ではありません。

また表現には正解 / 不正解もなく、美しさや上手さといった尺度で評価されず、素材や道具の常識的な使い方といったもので危険でない限り制限されないという前提で、自分自身が対象と対話しながら表現する体験をします。その体験を通し、未熟な存在と思われていた子どもが大人と遜色なく、それ以上に鋭い感性を持ち、果敢に自分の可能性を切り拓いていく存在であるということを皆さんと共有していきたいと思っています。

木村 真理子（アトリエウロン 主宰）
1998年東京造形大学造形学部デザイン科1類卒。
広告宣伝のグラフィックデザインを行いつつ、2011年フリーランスに。青山学院大学社会情報学部ワークショップデザイナー育成プログラム受講。造形講師の活動開始。2013年よりアトリエルマタン浅羽聡美先生に師事。対話型鑑賞法「アーツ&ダイアログ」鑑賞ファシリテーター基礎研修修了。イベント、保育園、学童、自宅アトリエなどで造形講師活動を行う。

きこちゃんのご自宅のアトリエです！
とても素敵なのでぜひご覧ください！

ATELIER UURON

〒240-0116 神奈川県三浦郡葉山町下山口 1568-4



今月のコラム

from
もりもり

子どもの歯磨き粉っていつから？

我が家には2人の息子がいます。上は4歳、下は1歳です。最近、子どもたちの歯磨きについて考えるタイミングがありました。これまでは、ブラッシングとフッ素のジェルのみを使って朝と晩に歯磨きをしていた我が家なのですが、「歯磨き粉っていつから使う?」「フッ素のジェルだけではダメ?」という疑問を持ち調べてみました。結論から言うと、歯磨き粉とフッ素の併用が効果的だということが分かりました。

なんで歯磨き粉やフッ素が必要なのか？

虫歯予防に最も大切なのは、ブラッシングによる歯垢の除去。歯磨き粉は絶対に必要というものではないけれど、生え始めたばかりの乳歯はとてもやわらかいので、むし歯になりやすい弱い状態にあります。

ブラッシングだけでは歯を強くする効果はないので、むし歯リスクが高まります。

そのため、歯磨き粉やフッ素ジェルを使ってむし歯に負けない強い歯づくりをしていきます。

どんなものを使えば良い？

歯磨き粉やフッ素は様々なものが売られています。お子様の年齢や発達に合わせて選択してあげてください。

例えば、子どもには研磨剤が入っていないものが良かったり、うがいが上手くできないうちは、ジェルや泡タイプがおすすめです。また、口に直接入るものだからこそ「成分が心配」「誤って飲んで大丈夫な安全なものを使いたい」と思う保護者の方もいると思います。ナチュラル思考の方向けに無添加歯磨き粉という選択肢もありますね。



さいごに

歯磨きって大変に感じることもあるけれど、大切な歯を守るために親である私たちがしてあげられることを続けていきましょう！



お蚕さん物語

記事ライター

子どもからは「かおちゃん」の名で親しまれている、KIDS SMILE LABO の園長。15年の保育現場経験を経て、保育園 KIDS SMILE LABO を開園。趣味の畑作業を通して、日常的に自然に触れ、「地域」「家族」「自然」「仲間」と繋がることを自身のテーマとして日々追究している。

保育園 KIDS SMILE LABO
園長 松下 かおる

KIDS SMILE LABO に、はじめて『お蚕さま』をお迎えしました。

お蚕さまを提供して下さったのは、LIFE is ART 展でも一緒した、カミコー株式会社で代表取締役をされている小島明子さんは愛川町にある馬渡（まわたり）コクナリ（養蚕所）という工房で養蚕への情熱を向けていらっしゃいます。

LABO で子どもたちにお話していただいた時には「あっこママ」という愛称で、自作していただいた段ボールの模型を使いながら、お蚕さまについて丁寧に説明してくださいました。

蚕については、大人のわたしたちも知らないことが多く、その一つとして、蚕は人間がいないと生きていけないよう改良されている昆虫で、数え方は「一頭、二頭」というように、頭で数えるということ。人類が最も研究した家畜とも言われているそうです。

今回の飼育をさせていただくことで、厚木、愛川町の蚕の歴史にも少し触れていきたいと思います。



参考 <https://www.maff.go.jp/j/meiji150/you/04.html>

蚕養手びき草（こがいてびきぐさ）（明治5年（1872））

養蚕の歴史

蚕の繭から生糸を生成する養蚕技術は、古代中国が発祥とされています。日本には紀元前200年ごろに伝わり、神奈川周辺で養蚕が始まったのは今から1300年前と言われています。

養蚕は、昭和の中期頃まで、神奈川県中央部から丹沢地域を中心として、全国的に盛んに行われていた一大産業でした。このように以前は隆盛を誇った養蚕は日本が世界一の生産量になったことがありましたが、化学繊維や外国産に押されたこと、国の養蚕農家への補助金制度が打ち切られたことにより、県内の農家の大半が廃業に追い込まれ、残念ながら現在では廃れてしまっています。

カミコー株式会社さんのある愛川町はかつて養蚕が盛んに行われていた地域で生産された繭は繭検定所に集められていました。（現在は中央公園になっているそうです）

愛川町は自然に囲まれた一帯ですが、平地が少ない為水田にも畑地にも恵まれなかったといえます。

このことで収入を増やす手段として養蚕が選ばれたようです。

繁栄していった理由として平地が少ない反面、川や沢が多く撚糸機を動かす水力が多いこと。撚糸製造に不可欠な一定の湿度が地形上保たれていたことなどが理由の一つにあげられています。そして、以前から半原に根付いていた優れた技術を持つ宮大工が、水車の動力を活用し生産性を上げる機械を作り、他にはない撚糸機の発展に貢献したことで、一大産地として栄えていきました。

※繭検定所とは：繭取引を円滑公正に行うために品位を調べること。蚕糸業法により都府県の繭検定所で行なっている。生糸量に関する項目として選除繭歩合と生糸歩合、繭格に関する項目として解舒率と繭糸長がある。かつては繭糸織度、小節点、繭の整齊度も繭格の増減点として検定の項目に入っていたが、1965年からは採用していない。繰糸の自動化に伴い、繭検定も自動繰糸によるようになった。



参考 <http://www.kaikologs.org/archives/12318>

KIDS SMILE LABO のある厚木市でも、かつては1500軒を超える養蚕農家があったのですが、今は担い手がなくなってしまった養蚕業。かつて人々の暮らしに根付いていた養蚕に再び光を当てたいという情熱から、小島さんは取り組みをされています。



現在の養蚕所
馬渡コクナリ工房



蚕を祭る神様



養蚕所の蚕の様子

地域による蚕の特徴

今回提供して下さったのは、相模蚕という種類で大正時代に神奈川県蚕業試験場で開発された品種だそうです。蚕と一言でいってもその種類は多く、各地域により品種改良を繰り返された結果、現在日本には約600種類ものカイコの品種が知られています。

桑の葉

蚕の餌になるのは、桑の葉です。かつて養蚕が盛んだった地域では桑畑があり、桑の葉が栽培されていたそうです。

今回使用させていただいた桑の葉は、普段子どもたちと目にしていない桑の葉とは違いがありました。桑の葉の特徴である葉の中に切れ込みはなく、大きな柔らかい一枚の葉でした。品種は『春日』という名前と教えていただきました。『春日』は蚕のエサとなる桑の木の一品種です。養蚕業が隆盛期を迎えた明治期に、偶然愛川町の中津で発見されたそうです。大きく柔軟な葉をもって、「春日」と命名されたこの桑は、大正5年（1916）、当時の国立中央蚕業試験場の品評会で優勝したことなどから、名桑（めいそう）といわれ、養蚕農家で需要が増え、養蚕が盛んだった昭和30年頃までは、多く栽培されていたそうです。

参考 https://pocketniakawa.com/a_025/



馬渡コクナリの桑畑



桑の葉を食べる蚕



あっこママより



ラボにお蚕さまを連れて行った日、子どもたちは好奇心を抑えきれない様子でたくさんの質問をしてくれました。それから毎日のお蚕さまのお世話をとおして、生き物を観察する面白さや、優しく扱う大切さなどを感じてもらえたのではないかと思います。私は生き物の観察が大好きで、とあるきっかけでお蚕さまを飼いはじめました。お蚕さまは夜も休まずに桑の葉をもりもり食べて、あっという間に成長します。糸を吐き始めると、からだは透きとおって見えるようになり、その次の朝には真っ白な俵型の繭に変身しています。繭の中でも魔法のような変化は起り続け、糸を吐き始めてからおよそ2週間後には羽のある姿になって現われるのです。卵から孵ってから1か月あまりのこの不思議な変化に繰り返し立ち会いますが、その感動は毎回新鮮です。この機会に、暮らしの中の絹製品を探してみたり、いつも歩く道に養蚕の記憶を探してみるのも面白いのではないのでしょうか。



神奈川県愛甲郡愛川町田代 231

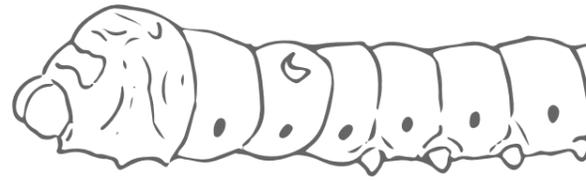


子どもとお蚕さんの1ヶ月

written by Reiji Akamatsu

蚕とのであい

5/28



ラボで始まった蚕さんとの暮らし。毎朝葉っぱを綺麗に食べ切っており、まだ小さくデリケートなため大人がお家の掃除をし、子どもたちはその様子を側で見守るところから始まりました。成長スピードは凄まじく、数日で脱皮を行い、土日を挟むと一回りも二回りも大きくなっている蚕さん。葉っぱを食べる様子を観察していると「あげてみたい」「さわってみたい」と子どもたちから声があがりました。手の平の上で蚕さんが食べる様子を子どもたちは息を呑み見つめます。食べてくれることが嬉しい気持ちやおしりからうんちが出てくる瞬間を目撃するなど、どんどん蚕さんに魅了されていくのでした。

あっこママがラボに連れてきてくれた蚕さん。手作りの模型で蚕さんの一生についてを教えてもらいました。繭は糸となり、みんなが着ている洋服にもなるということもその時に知りました。蚕さんを初めて見た時「ちいさいね」「やさしくしてあげないとね」と呟く子どもたち。その時の蚕さんは3センチほどで本当にとっても小さな幼虫でした。



くわのは
いっばいたべてるね!

数日たって...

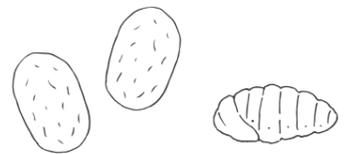
6/4

あっという間に8センチとかなり大きくなり、その頃には子どもたちも親しみをもち、手の平に乗せ、動く足のくすぐったさも感じていました。臭いと言っていたうんちもきちんと嗅いでみると葉っぱの匂い。幼虫が大きくなってからは子どもたちがうんちを変えて、お部屋を掃除してくれた日もありました。やがて繭を作る準備を始めたので、それぞれのお部屋を用意すると次の日の朝には繭ができていた蚕さん。



繭をどうしていく?

6/20

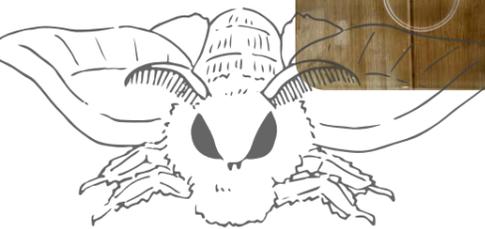


繭を作った蚕さんのその後は、繭から糸を取る、羽化させて蛾になり卵を産むところまでを見守る、この2つの選択肢がありました。糸をとってみたい子、羽化した蛾を見たい子、それぞれの思いがあったので子どもたちと話し合いました。糸をとるということは、繭を冷蔵庫に入れて中にいる蚕さんを死なせてしまうということ。子どもたちの素直な感想は「かわいそう」でした。糸をとりたという子からは、半分は蛾に羽化させて半分は糸にしてはどうか?糸になるために死んでしまった蚕さんは埋めてあげる、などの意見が出てきました。

「死んでしまうのはかわいそう」という子たちには蚕さんはただ死ぬのではなく、新しく糸になりまたみんなのところへ戻ってくる。生き物を殺してしまうのはかわいそうだけれど、みんなが生きていくために普段からお肉やお魚も食べていること。だから食べる時にはいただきますという、ありがたいの気持ちを言葉にしているよね。蚕さんも糸にして大切にに使わせてもらい、ありがたいの気持ちがあると嬉しいんじゃないかな?という話もしました。

視覚的に分かるように蚕さんを、半分に分け繭を移動させながらどちらも納得ができることを考えました。蛾になると卵を産んで今よりも増えるということも話し、2頭や3頭だけだと性別が偏ってしまいそれでは産めないということも踏まえて、最後は糸を取る繭は11個、蛾にする繭は6個に決まりました。今のみなそらだいちさんは全員で17人。みんなが糸をとることは難しいという話では「チームでやってみたらいいんじゃない」と、限りある繭をどのようにしていくか考える姿もありました。糸にする繭はみんなで冷蔵庫へ。子どもたちから自然と「ありがとう」という言葉も出てきていました。

たった一晩で
まゆに変身したお蚕さん!



羽化

6/20

土日に羽化し、
休み明けに子どもたちと再会!



お蚕さんとの出会いを通して

今回、蚕さんとラボで過ごす中で、子どもたちは生き物の可愛さや生き物への思いやりを持つなど、沢山気持ちを動かしてきたと思います。糸にするか、蛾にするかの話では生と死についても考えてみるきっかけにもなりました。約1ヶ月ととても短いようで早い毎日でしたが、きっとこの1ヶ月は子どもたちの中に残り続けるものだと思います。糸をとると決めた蚕さんにはありがたいの気持ちを持ち、糸を取らせてもらいたいです。

文れいじくん